

# 今田敬一の見た風景

—今田敬一資料の再編成を通して—

木村由美

**はじめに** 本稿は、札幌市公文書館で所蔵している「今田敬一資料」(以下「今田資料」)の再編成の報告と、資料の紹介をするものである。今田敬一は明治29年(1896)秋田市生まれ、明治32年に養蚕指導者であった父親の都合により札幌へ移住、以来昭和56年(1981)5月5日に84歳で生涯を閉じるまで札幌で過ごした。北海道師範学校附属小学校から札幌中学校(現・南高)、東北帝国大学農科大学(現・北大)予科を経て、大正7年(1918)北海道帝国大学農科大学へ入学、大正10年同大学農学部林学科を卒業し、同大学助手、助教授、そして昭和23年には北海道大学(北大)教授となった。専門は林学であり、北大農学部林学科の最初の教授であった新島善直の「森林美学」講座を継承した。また画家としての顔も持ち、明治11年に有島武郎を中心に創設された北大「黒百合会」に予科生時代から参加し、その後「道展」(北海道美術協会)に創設時から関わり会長まで務めた。

今田資料は札幌市公文書館の前身、札幌市文化資料室に昭和50年代後半に、今田の娘である渡辺敬子氏より寄贈された。その後、登録され現在まで公文書館にて保存・利用されてきた。しかし最初の登録から約30年以上が経過し、平成27年度に改めて資料の再編成を行い、今田資料の中から重要なものを「特定重要公文書」として登録替えをすることになった。

第1章では「今田資料」の再編成の過程について述べ、第2章では今田敬一の生涯を振り返りつつ、公文書館所蔵の「今田資料」を一部紹介したい。

## 第1章 資料の再編成

### 1 再編成の意義

まずは公文書館所蔵資料の概要について確認しよう。公文書館の所蔵資料は、大きく2つに分類される。ひとつめは「特定重要公文書」、ふたつめは「一般資料」である。「一般資料」はさらに「文書・図書」「写真」「地図」「絵葉書」「新聞スクラップ」「私文書」の6つの資料群に分けることができる。「特定重要公文書」は目録が公開され、ホームページからも検索が可能である。また「一般資料」のうち、「私文書」以外については目録が公開されているが、「私文書」だけは目録は公開がされていない。「今田資料」は今回の再編成を行う前は、「文書・図書」と「私文書」に分散して登録されていた。目録の作業完了日を確認すると「文書・図書」は昭和56年(1981)6月6日、「私文書」は昭和59年6月15日であった。恐らく2度に分けて登録が行われたのであろう。

また、目録が公開されている「文書・図書」と、公開されていない「私文書」に分かれてしまった上に、「文書・図書」は資料ごとに別々の図書分類記号が付され、【表-1】のように分散した状態で分類されていた(表の「分類」は札幌市公文書館独自のものによった)。これらの要因により、「今田資料」の全体像が見えにくくなってしまい、的確なレファレンスが行えなくなっていた。

さらに今回調査した結果、「今田資料」は札幌市公文書館以外に、道立図書館(273点)と近代美術館(所蔵資料点数不明)で所蔵されていることがわかった。これにより資料が分断されてしまい、例えば、屋外広告物審議会関係資料について、道立図書館では昭和26年の資料を、札幌市公文書館では昭和28年以降の資料を所蔵しているように、施設間をまたいで分断が生じてしまっていることが明らかになった。

以上のような点を踏まえ、公文書館所蔵の「今田資料」を各資料群から集め、全体像を改めて確認した上で、重要なものを「特定重要公文書」として1つの資料群として登録し、資料の全体像を把握しやすくすることを目的とし、再編成の作業に入った。作業過程は以下のようなものである。

- ①現状把握:「今田資料」を公文書館所蔵資料全体の中から抽出し、全体像を把握する。
- ②選別:「今田資料」の内、「特定重要公文書」として登録替えをするものを選別する。
- ③再編成:選別した資料を内容別に再編成をし、シリーズ化をする。
- ④補修等:ドライクリーニング、補修、封筒(中性紙)入れをし、保存箱へ入れる。

⑤登録:特定重要公文書「今田敬一資料」としてシステムへ登録する。

⑥排架:保存箱を書庫へ排架し、箱ラベルを貼る。

それでは、次項よりこれらの具体的な作業内容について述べることにしよう。

## 2 作業過程の報告

①現状把握 まずは「今田資料」の再編成前の登録状況を【表-1】【表-2】により見てみよう。「文書・図書」として登録されていた資料は724点、「私文書」として登録されていた資料は104点であり、合計828点の資料があることがわかった。【表-1】の「文書・図書」で特に多い分類は、「分類記号:377 大学・専門学校」であり、これは北大の教員であり卒業生であった敬一が北大関連の資料を多く所蔵していたためである。また「分類記号:680 交通」は観光関係の資料が、「分類記号:202.2 文化財保護」は文化財の調査報告書が多かった。また、これらの資料の多くは、敬一自身が務めていた審議委員会の会議資料であり、中には本来1冊であった会議資料がいくつかに分冊され、別々の分類に登録されているものもあった。そのため、会議資料としての本来の資料の意味が失われてしまっているものもあった。また会議資料の内、議事録と資料を分け、それぞれ数年分ごとに合冊したものもあり、資料受入時の原秩序が失われていた<sup>1)</sup>。その他、「分類記号:289 個人伝記」の中には、今田自身が書いた原稿や草稿が多く含まれ、分類も適切とはいえない。

【表-2】の「私文書」は形態別に見てみると、敬一自身が書いたノートや絵が含まれていた。「私文書」の中には年代や著者が不明な資料もあるが、これらは「文書・図書」に登録されていた資料と合わせて調査することで、資料の背景や意味もより詳しくわかる。

②選別 このように「一般資料」として登録されている「今田資料」828点であるが、それらを抽出し、選別をした。選別する基準は、札幌市公文書管理条例第2条に則り「市政の重要事項に関わり、将来にわたって市の活動又は歴史を検証する上で重要な資料」とし、それらを「特定重要公文書」として登録替えることとした。その中の中心となる資料が、今田自身が務めた審議会関係の資料である。公文書館所蔵の「今田資料」に含まれている審議会資料は、【表-3】に挙げた審議会のものがあつた。その他、一般に刊行されていない一次資料を「特定重要公文書」として選別することとし、刊行されている資料については「文書・図書」に残すこととした。その結果、「文書・図書」724点中245点と、「私文書」104点を選別し、合計349点を「特定重要公文書」に登録替えをすることとした。

【表-1】「文書・図書」への登録状況

分類	項目	点数	分類	項目	点数
010	図書・図書館	3	371	教育	6
029	蔵書目録	1	373	教育関係職員録	2
030	百科事典	18	375.1	教育課程・学習指導	1
051	雑誌	2	375.3	中学・高校教科書	21
070	新聞・放送	24	376.3	高等学校(旧制中等学校を含む)	19
080	叢書・全集	30	376.4	その他の学校	1
100	哲学・宗教	21	377	大学・専門学校	77
200	歴史一般	1	382	生活の習俗	3
202.1	考古学	4	389	民族学	1
202.2	文化財保護	45	390	国防・軍事	3
202.3	博物館	1	400	自然科学一般	16
210.1	日本史総合史	14	460	生物科学	22
210.3	全国地域史	1	470	農林水産技術	2
211.1	道史総合史	2	500	技術・工学	34
211.3	道内地域史(開拓史)	3	630	博覧会	1
211.6	道史研究	1	650	農林水産業	24
212.3	市内地域史	4	660	鉱工業	2
212.4	郷土読本	1	670	商業	11
212.5	市史資料	2	680	交通	73
280.2	伝記集	2	690	通信	3
280.3	職員録	1	700	芸術・文化一般	31
288	系譜・家史・皇室	3	710	美術・工芸	23
289	個人伝記	32	720	美術・工芸カタログ	2
290.1	地理一般	3	760	芸能・娯楽	7
290.3	地図	5	780	体育・スポーツ	6
291.1	地誌(道内・市内以外)	26	800	語学一般	3
291.2	道内地誌	11	900	文学一般	2
291.3	市内地誌	3	909	児童文学	2
310	政治一般	1	911	詩歌集	1
317	行政一般	1	913	小説・戯曲	1
320	法律・司法・保安	2	914	評論・随筆・日記・紀行	6
340	財政・税政	1	916	ルポルターージュ	1
353	北海道	17	918	作品集	1
353.2	その他(石狩支庁以外の支庁)	5	B2	秘書	1
354	道内市町村	16	H3	公園緑地	1
360	社会一般	1	U1	交通	1
367	社会問題	1	U5	(行政資料)市営施設	2
369	社会福祉	1	W6	旧豊平町	1
			合計		724

【表-2】「私文書」への登録状況

形態	件数	形態	件数
絵	11	書	1
楽譜	1	書簡	1
画帳	7	新聞切抜	11
金属板	6	ノート	30
原稿	6	文書	19
色紙	3	放送台本	4
写真	2	木版	2
		合計	104

③再編成 次に、選別した「今田資料」をなるべく元の秩序に近い状態に戻す作業を行った。まずは資料を審議会資料については審議会ごとに、審議会以外の資料については年代順あるいは内容別に再編成し、この作業により14のシリーズに分けた。その結果が【表-4】である。また資料にはそれぞれ「今田1～今田349」の仮IDを付した。

④補修 「文書・図書」で登録されていた「今田資料」の内、表紙のない資料には、画用紙で作られた表紙がホチキスで止められていた。しかし、ホチキスは約30年の時を経て錆が発生し、酸性紙を用いた資料は劣化が進み、湿式コピー等の資料については文字が消えかけていた。そのため、まずは資料のホチキス外しを行い、取り付けられていた表紙を外す作業を行った。文字が消える恐れのある資料についてはコピーをとり、劣化が進んでいる酸性紙の資料については中性紙の封筒に移し替えた。

⑤登録 ③により再編成した「今田資料」は、特定重要公文書「今田敬一資料」(簿冊コード:2015-0700)として公文書管理システムに349点を一括して登録した。これにより平成28年度4月よりインターネット上でも検索が可能となる予定である。資料1点ずつの簿冊名は现阶段では登録されておらず、資料請求があった場合には、紙目録を提示することで利用者には情報を提供したい。将来的には1点ずつの情報を「件名」として登録し、ネット公開する予定である。

⑥排架 登録された「今田資料」には簿冊コード、仮IDを記入したラベルシールを貼り、保存箱に収めた。箱数は全部で18箱となった。箱には他の「特定重要公文書」同様に、箱ラベルが貼り、通常は「移管時保管単位(部局名)」を記入する欄には、「今田敬一資料」と記入した。また簿冊コードの記入も、349点が全て「2015-0700」と同じコードになってしまうため、代わりに仮ID「今田1～今田349」を記入した(【写真1】)。

以上が「今田資料」の再編成の過程である。作業過程をまとめると【図-1】のようになる。原秩序が壊され、別々の資料群へ登録されていた資料が、35年の時を経て再び集められ、元の原秩序に近い形に再編集され、新たに「特定重要公文書」として生まれ変わった。目録公開される平成28年4月以降に、資料がさらに活用され、市民の知の宝庫の一つとなり活用されることを願う。

【表-3】「今田資料」にみる審議会、協議会名

文化振興協議会
文化振興審議会
札幌市文化財保護審議会
文化財専門委員会
北海道社会教育施設設置審議会
北海道観光審議会
北海道屋外広告物審議会
放送番組向上委員会
放送番組向上協議会
札幌テレビ番組審議会
北海道立三岸好太郎美術館協議会

【表-4】再編成によるシリーズ化状況

旧資料群名	特定重要公文書へ再編成後		資料の概要	点数	合計点数
	シリーズNo.	シリーズ名			
私文書	1	私文書	絵、ノート、画帳等	104	104
文書・図書	2	文化	文化振興協議会資料、文化振興審議会資料等	17	245
	3	百年記念	北海道百年記念事業関係資料	26	
	4	文化財専門	文化財専門委員会資料等	22	
	5	文化財保護	文化財保護委員会資料、文化財調査資料等	16	
	6	公園	道立公園関係資料、国定公園関係資料等	23	
	7	観光	北海道観光審議会資料等	68	
	8	屋外広告	北海道屋外広告物審議会資料等	13	
	9	文化賞	文化賞関係資料等	5	
	10	美術	三岸好太郎美術館協議会資料等	7	
	11	経歴	委嘱状、少年期書画等	5	
	12	原稿	原稿、草稿	23	
	13	放送	番組向上委員会資料、札幌テレビ番組審議会資料等	9	
	14	その他	桑園連合公区関係、真駒内森林保護関係資料等	11	
	総計				

【図-1】「今田資料」再編成の過程

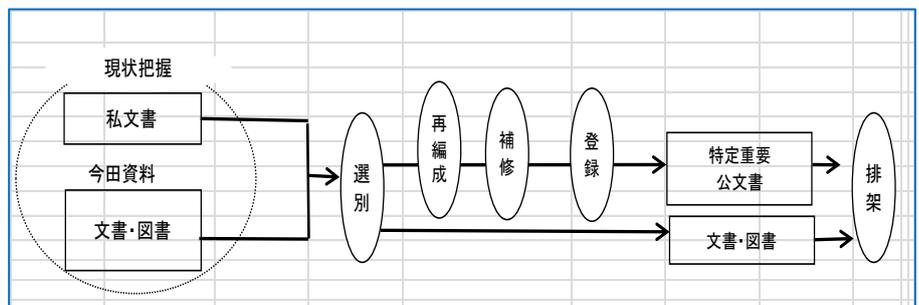


写真1 左:通常の保存ラベル  
右:今田資料のラベル

## 第2章 今田敬一の生涯と所蔵資料紹介

本章では今田敬一の生涯を振り返りつつ、公文書館所蔵の「今田資料」を紹介しよう。また、今田の生涯については資料に乏しく、「わたしの道」『北海タイムス』昭和48年1月24日～2月8日)が詳しいため参考にした。

### 1 絵画と出会った幼少期

今田敬一は明治29年11月8日、山形県出身である今田佐吉・清井(きよい)の間に生まれた。4つ上に姉がおり敬一は2番目の子であった。その後弟が3人生まれ、5人姉弟として育った。父の佐吉は養蚕の技術指導者として各地を歩いており、敬一が生まれたのは秋田市であったが、4歳の時、父親の仕事の関係で札幌へ移り、北9条西3丁目の北大の近くに住んだ。明治36年、数え8歳で北海道師範学校附属小学校へ入学し、当時の遊び場は大通であったという。その頃、一家は北2西13に引っ越しをしたため、南1西14にあった小学校へ通う途中、現在の地方裁判所辺りにあった森の中をくぐって行った。敬一が小学校時代に始めたものには、かけ足と絵がある。かけ足は小学5年から日課とし、自宅から札幌国道を登寒辺りまでかなりの距離を走ったという。絵は、小学校に何人かの水彩画好きの先生がいて、その作品を見せてくれたりしたのがきっかけであった。小学生で絵筆を持つような子供はほとんどいなかったが、父に水彩用具一式を買ってもらい、小学4、5年生で絵を描き始めたという(【写真2】【写真3】【写真4】)。

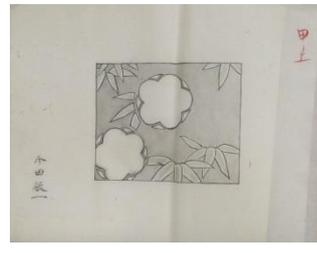


写真2・3・4(左から) 今田302 敬一の描いた絵(尋常小学校6年 写真4は学年不明)

明治43年、敬一は北10西4にあった札幌中学(旧一中、現南高)へ進学した。そこで図画教師の林竹次郎と出会い、絵画・美術についてのいろいろな常識を身に付けたという。またクラスにも絵が好きで生徒が多く、能勢真美も同級生であった。しかし引っ込み思案な性格で、絵の仲間と積極的に活動することはなく、最愛の友は“自然”であったという。また柔道は一年生から始め、歩くことも趣味としていた。一人歩きが好きで自然の中の自由をこよないものとしていた。

中学時代から北大構内を通学路としていたため、自然と進路を北大林学科と決め、札幌の豊かな自然が、開発が進むにつれ木が切られるのを見聞すると、『林学科に入り、木を植え、育てる仕事に一生をかけよう』と決めたという。

### 2 ドイツと森林美学

大正4年、中学を卒業した敬一は東北帝国大学農科大学の予科生となった。ここでは語学教育に非常に力を入れていて、週に英語が6時間、ドイツ語が9時間もあり、予科3年間に敬一は語学力を身に付けることができた(【写真5】)。

林学関係の文献はドイツ系のものが多く、ここで身に付けた外国語は、大正7年農学部林学科に進んでから大変役に立ったという。敬一が予科に入る少し前の明治44年、北海道では山火事が多く発生し、札幌でも三角山などが丸焼けになったという。この山火事の惨状を、山歩きをしながら目の当たりにした敬一は、自然保護を生涯の仕事とする気持ちをますます強めた。そんな敬一は学部に入り、新島善直教授の『森林美学』という学問に触れることとなる。『森林美学』とはドイツ林学の理想のあらわれで、ゴットロープ・ケーニッヒの思想を源に、ヨーロッパのよき時代—19世紀末ごろ、ハインリッヒ・フォン・ザリッシュにより実を結んだ学問で、良識から出発した学問である<sup>3</sup>。

敬一は大正10年農学部林学科を卒業後、そのまま新島教授づきの助手となり、大正15年助教授となり新島教授の『森林美学』の講義を引き継いだ。その後敬一は研究の所産となる学位論文『森林美学の基本問題の歴史と批判』(昭和9年出版)をまとめる。このような森林美学の研究を通じ、自然保護、自然愛護についての文献にも接しめを開かれていったという。

北大での敬一の講義について、教え子である元滝川市長・林芳男は、「先生の講義は物静かで重みのある声で始

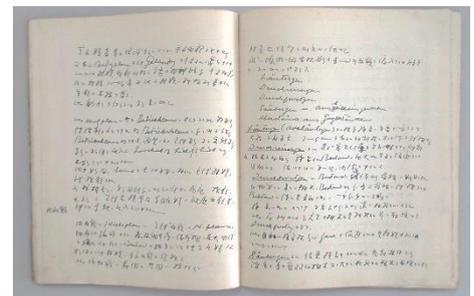


写真5 今田48 ドイツ語で書かれたノート

まり、森林美学の説明の段階ではしばしば黒板を使い白いチョークで表現される様々な風景は、時に色彩感覚や美的感覚を求められるような威圧感も伝わり、人気が高かった」と振り返っている<sup>4</sup>。

### 3 結婚後の生活

大正13年、敬一は北大水産部門の野沢俊次郎教授の娘・寛子と結婚した。敬一はそれまで神経質な面があったが、結婚後は大変のんきになったという。妻の寛子が至っておっとりした性分だったからのようだ。敬一はこまごまとした雑用を苦にせずやる方だったので、寛子はますますのんびりしていったという。2人の生活は大いに簡素化されたもので、家も新築せずに借家主義を貫き桑園界隈で引越しばかりし、ふろも銭湯主義で家の風呂は物置きと化していた。しかし戦時の住宅不足で挫折するまで新築借家主義を続けたという。「わたしの道」が書かれた昭和48年現在も、簡易生活を続けていたという(桑園界隈の風呂屋については【地図】参照)。

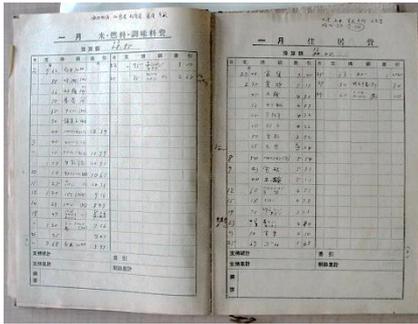


写真6 今田9 昭和4年 家計簿

公文書館で所蔵している書簡の住所と日付によると、恐らく戦時期ころより「北2西18」に住所を構えたようだ。この住所宛の書簡は昭和12年が最も古い日付であった。その後亡くなるまで敬一はこの北2西18の住宅に住み続けているようである。

ここで敬一が住んでいた桑園界隈の大正から昭和初期の様子を見てみよう。『桑園誌—30年の足跡をたどる』によると、昭和2年には、市電が札幌駅前から西20丁目、昭和4年には桑園駅前まで開通し、昭和3年には桑園小学校が開校した。明治のおわりころの桑園地域は240軒くらいの家があったとのこと。大正、昭和にかけて住む人が多くなり、西11、12丁目の北5条通りに沿って商店街が西へと延びていき、電車停留所、学校付近に商店の群落ができた<sup>5</sup>。

「今田資料」に2冊の家計簿が残されている。1冊目(仮ID:今田9、【写真6】)は昭和4年、2冊目(仮ID:今田66)は年代不明である。1冊目では項目ごとに分けて記入され、住居費の項目では家賃23円、電燈2円30銭、石鹸4円70銭など細かく記入されている。こまごまとした雑用が苦ではなかった敬一が記録したものであろう。

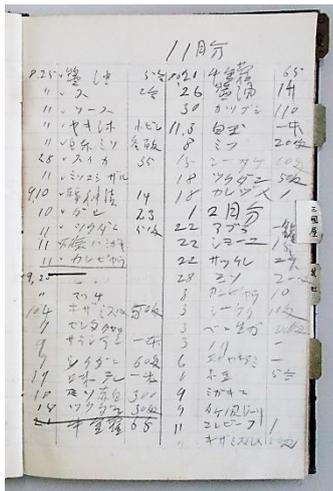


写真7 今田66 掛け買いの帳簿 (三国屋南部商店)

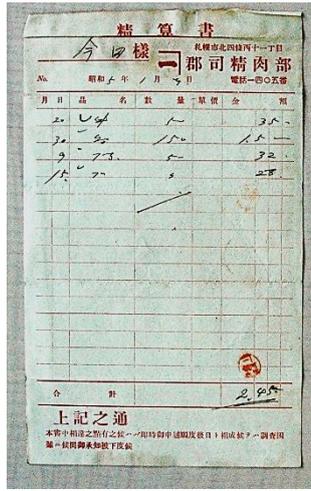


写真8 今田9 郡司精肉部の清算書(昭和5年1月末日。牛肉、豚肉など購入している)。

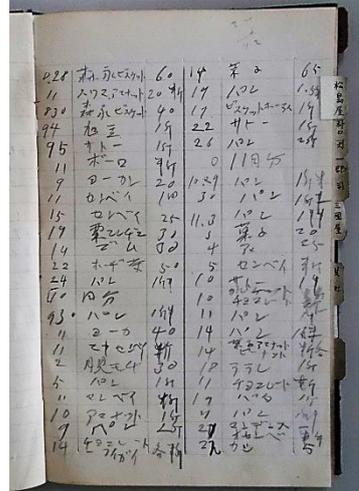


写真9 今田66 掛け買いの帳簿(松島屋菓子店)

また2冊目の方は、掛け買いを記録した帳簿で、店ごとに購入したものが記録されている。例えば北5西12にあった松島屋(菓子店)、三国屋南部商店(雑貨、食品)や、北4西11郡司精肉店など、桑園界隈の商店を利用していることがわかる。(商店の位置は【地図】参照)。三国屋南部商店は、大正2年に狸小路の雑貨商三国屋の分店として開業し、店ではお酒や食品が主で、ビールや蜂ブドー酒、それにペパーミントとかキュラソーとかの洋酒に、ハム・ベーコンも売っているハイカラな店であった<sup>6</sup>。今田家はこの三国屋南部商店で、調味料(味噌、醤油、ソース)や佃煮、スルメなど購入している(【写真7】)。郡司精肉店は、大金畜産の創業者・大金武が親戚である郡司牛肉店(北3東2)で修業したのち独立し、大正6年北5西11に出した店である。昭和の初めに北4西11に店を移し、現在も大金畜産として続いている<sup>7</sup>。店名は当初「郡司精肉店」をそのまま引き継いでいたのか、清算書では「郡司」の名前がそのまま使われている(【写真8】)。松島屋は当時評判の良いお菓子屋であり<sup>8</sup>、今田家ではパンやチョコレート、森永ビスケット、甘納豆などを購入しており、特にパンは3~4日ごとに購入している(【写真9】)。

桑園界隈には博士町があり、大学の先生たちが商店を利用していた。洋行の先生たちが多く、食品も輸入したものを取り扱っていた。今田家の食卓にもパンが並び、洋風な食事をとることもあったであろう。

桑園界隈には博士町があり、大学の先生たちが商店を利用していた。洋行の先生たちが多く、食品も輸入したものを取り扱っていた。今田家の食卓にもパンが並び、洋風な食事をとることもあったであろう。



#### 4 桑園連合公区第五公区長として

「わたしの道」によると、戦時中、敬一は桑園連合公区第五公区長を務めたという。公区長を務めた時期は不明であるが、昭和18年(1943)10月から第五公区八班班長を、翌19年10月からは第五公区副公区長を務めている<sup>9</sup>。『新札幌市史』(第4巻)によると、公区とは昭和15年に全市域を311に区画して公区を設定し、20ほどの公区が集まって16の連合公区を組織したものである。昭和10年から13年にかけて展開された選挙粛正運動、これに続く国家総動員法の成立と国民精神総動員計画は、全市民に国策を浸透させ、順応、協力、奉公を求める必要があり、札幌市はこれに対し、施策を住民に浸透させる組織として、公区を組織した。これを市役所が掌握統制することによって、市政の効率的運営をはかろうとしたものである<sup>10</sup>。公区は何度か変更され昭和19年には311から277になった。「今田資料」には敬一が描いたと思われる桑園連合公区位置図がある(【写真10】)。この図の⑤(左下枠囲み部分)が桑園第五公区であり、組織された戸数は約200戸であった。

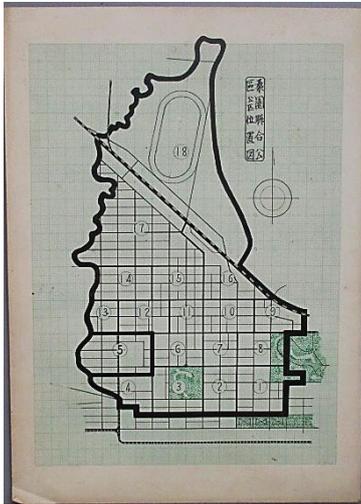


写真10 今田14 桑園連合公区  
公区位置図

公区連合公区役員は無報酬で、重い責任を担い多くの業務を抱えることになった<sup>11</sup>。敬一はもともと公共心の強い性格であった。「わたしの道」によると、「人知れずだれかのために奉仕する」というようなことを、別に無理せず自然にしている様子だったという。公区長を務めている間、ありとあらゆることで来訪者が絶えず、自宅の玄関の戸も壊れてしまう有様だったという。とても学校などへも出ていられない状態の日も少なくなく、研究は中断された。

ここで、「今田資料」に残された桑園連合公区第五公区の「回覧板」(【写真11】)を見てみよう。内容は主に配給について、応召者の壮途式の案内について、国民貯金について、防空訓練についてなどである。「回覧板」によると、配給についてはスルメ、ほうれん草(冷凍)、ユリ根、飴、シイタケ、里芋(冷凍)、酒などの食糧品の他、木炭、薪、石炭といった燃料、ナフタレンといった薬品なども配給とされた。日常生活のあらゆる物資に配給が適用され、配給が公区業務の重要な部分を占めるに至ったという<sup>12</sup>(【写真12】)。その他、絵具まで配給になり、さらに戦争の絵をかけば、優先的に配給を受ける道もあったというが、敬一は性に合わず一度も配給を受けず、ほとんど絵らしい絵を描かなかったという<sup>13</sup>。

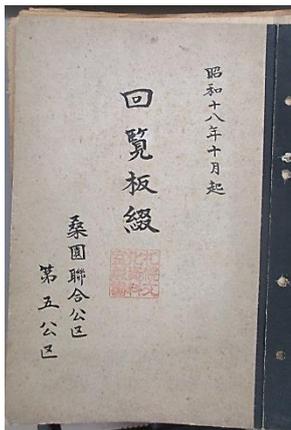


写真11 今田349 桑園連合  
公区第五公区 回覧板綴



写真12 今田349 今田家の配給切符。醤油、塩、  
油脂、主要食糧、木炭などの購入に使われた。

戦時中の敬一の活動として、道立図書館所蔵の「今田敬一氏寄贈資料140」によると、第三回北海道海洋美術展覧会の審査員を委嘱されていたことがわかる。この展覧会は第二回までの開催で海洋思想普及に好結果を残し、第三回を昭和20年7月20日海の日を記念して開催するとされている。7月7日付で敬一は審査員として委嘱状が渡された。しかし『北海道美術史』によると、北海道海洋美術展覧会は昭和17年より昭和20年まで4回開催され、毎年5月27日の海軍記念日に開催

したとされている。しかし、この委嘱状によると7月20日に第3回が開催するとなっており、詳細は不明である。

#### 5 童話作家として

終戦後、敬一は林学の研究以外に童話作家としての顔を残している。谷[1995]<sup>14</sup>によると、戦争が終わった昭和20年(1945)から昭和25年までのおよそ5年間、北海道は出版王国と呼ばれ、またその頃の出版物は「札幌版」と呼ばれた。その中に相当数の児童出版物も刊行されている。その一つに児童雑誌『北の子供』がある。昭和20年4月刊創刊から25年1月まで続き、発行部数は最盛期で1万5千だったという。童話、童謡、評論、北海道の自然、作文や詩の投稿欄等、多彩な内容で、執筆者もこれまで子どもの作品を手掛けたことのない作家が加わっていた。また、挿絵やカクトを描いたのは、当時の画壇で活躍していた画家やマンガ家たちであった。敬一もその一人で、『北の子供』第四号第七巻(昭和24年6月)に敬一が絵と文を描いた児童文学作品が掲載されている。ドイツに精通した敬一らしくその童話



写真13・14・15(左から) 今田26 「ドイツ童話 足なが、目だま、大耳」(北海道立図書館蔵)と、公文書館所蔵の下絵

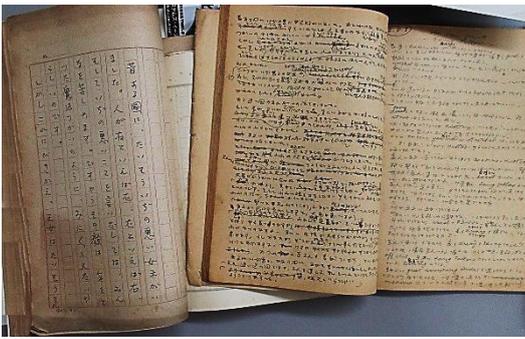


写真16 今田320、今田37 「童話」の草稿と原稿

は「ドイツ童話 足なが、目だま、大耳」であった。この童話の草稿、原稿、下絵は現在、公文書館所蔵「今田資料」に残されている(【写真13】【写真14】【写真15】【写真16】)。戦後、紙が不足していた時代に書かれたためであろう。草稿は北大図書館目録の裏紙を利用して書かれていた(【写真-16】)。

『北の子供』にこのような色刷の絵物語が登場するのは第3巻第8号からで、以後終号まで続き、その全てが世界名作童話であった<sup>15</sup>。「今田資料」(仮ID:今田320)には、「ドイツ童話 足なが、目だま、大耳」以外にもいくつかの童話の原稿が残されている。

童話について敬一は「えぞまつ」<sup>16</sup>の中でこう語っている。「私の性分は幼稚園向きらしく、いい歳をして今も童話が好きである。別に高

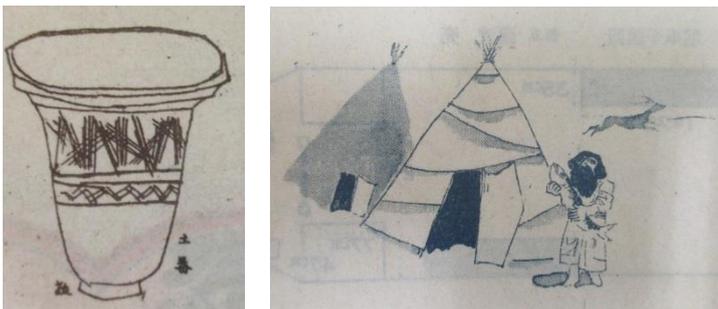


写真17・18 「子供のための北海道史(一)」(北海道立文学館所蔵)の挿絵

級童話に飛びつくわけではなく、その道の人には多分つまらないものも結構楽しめ、頭が重くなったときなどこれでさっぱりできる」。敬一にとって童話は楽しみの一つであり、気分転換の方法だったのかもしれない。その他、同じく終戦後の昭和21年、児童雑誌に掲載された高倉新一郎著「子供のための北海道史(一)」<sup>17</sup>「同(二)」<sup>18</sup>に敬一は挿絵を描いている(【写真17】【写真18】)。また児童向けではないが、同時期に同じく高倉新一郎著『北



写真19(今田25・28)、写真20(今田33) 『北の先覚』と表紙絵の下絵

の先覚』(北日本社、昭和22年)の表紙絵を描いており、その原画と下絵が公文書館所蔵「今田資料」に残されている(【写真19】【写真20】)。

戦争中、絵具の配給を受けなかった敬一は、ほとんど絵らしい絵を描かず、それが慣らしになってからは、絵を描くこと

が面倒になり、絵の道具はみんなほこりだらけの何年かが続いたという<sup>19</sup>。そんな敬一は戦後、児童向けに童話や挿絵、そして高倉の表紙絵や挿絵などを描いた。戦争中、絵を描いていなかった空白の時間から、再び絵を描き始める手始めに取り組んだのがこれらの作品であったのかもしれない。この後、昭和26年より激しい意欲で絵に取り掛かったという。

## 6 演習林からの手紙

敬一は昭和14年頃から一つの新しい研究をはじめていた。それは北海道のトドマツの造林に関するものであった。当時北海道ではトドマツやカラマツを主とした植林計画を進めていたが、失敗続きであった。敬一はトドマツの造林の失敗を探究するため、造林地のマイクロ気マ(地表に近い気象)を研究した。しかし前述のように戦時中に研究は中断され、

戦後、中断される以前に打った試験地の棒杭は全部腐って、跡形もなかったという。終戦後、再び研究を始めた敬一は北海道中の山を回りはじめた。

このように各地を回っていた敬一は、昭和29年出張先の演習林から妻・寛子へ送った書簡が、「今田資料」(仮ID:今田84)に残されている。内容は以下の通りである。

旭川で二等客はほとんど下車しましたが、新しい客でまた混みました。名寄からは空席が多くなりましたが、西日が反対の窓から射すと同時に大変暑くなりました。着くとすぐ濫谷さんから電話が来ました。数日のうちにまた美深に移る由です。明日こちらに来るかも知れません。今日は山で足と手を二度も蜂にさされました。手はまだ少し痛いです。アイフは加減アイフといふアイフで下痢をかねた葉でした。知らないで飲んだところ、お腹がゆるんで思ひがけなくおなかの掃除になり、おかしかったです。今日は午前中暑いくらいの良い天気でしたが、夕方から曇ってきて少し雨が降りました。十五夜の月は全くみえません。明日は山で苗木植えをやります。東さんも来るでせう。今晚の御馳走は焼豚、鮭のお刺身、烏賊の酢の物、おひたし、かまぼこの吸物、菜の味噌汁です。蠅がいろいろ合わりさうさいけれど建物もあたらしきれいです。室には電気付きのビクターのラジオがありまだ退屈してゐません。

上音威子府北大演習林

今田敬一

九月十一日夜

(消印:昭和29.9.12)

この書簡が出された「上音威子府北大演習林」とは「天塩第一演習林」(現・中川研究林)のことである。「天塩第一演習林」は、明治35年(1902)内務省より移管された第二基本林が始まりであり、幾度か改称し昭和3年「天塩第一演習林」となった。明治44年(1911)、この演習林を管理するため中川村咲来に看守所を置き、大正元年(1912)これを派出所と改め、大正4年鉄道付設とともに音威子府に派出所を移転し、教官及び学生の宿泊所を増設した。この派出所及び宿泊所は昭和27年度に改築を行っている<sup>20</sup>。改築された音威子府の宿泊所は当時としては非常に近代的な建物であったという<sup>21</sup>。ここに滞在中に敬一は書簡を書いたと思われ、改築を行ったばかりのこの建物を「あたらしきれい」と記している。

また列車内での様子や食事の内容など敬一の見た風景や、蜂に刺されたこと、蠅がうるさい様子など詳細に記しており、敬一の観察力がここからもうかがえる。その他、薬を飲み間違えたことを「おかしかったです」とユーモアのある表現で記し、敬一の人柄がうかがえる。近代的な新しい宿泊所で敬一は、ビクターのラジオを聴きながら過ごしたのであろう。

## 7 旅先での記録

「私と絵」<sup>22</sup>で敬一は、「私は[絵を]旅先ではほとんど描かない。そしてスケッチブックはおろか、重たい絵具箱などまで、かついでいくことは絶えてないのである。」と述べている。しかし公文書館所蔵「今田資料」には、敬一が旅先で

書いた絵がいくつか残されている。例えば、「利尻・礼文」(仮ID:今田32)と書かれた一冊のノートがある。敬一は昭和35年(1960)に北大を退職したあと、自然保護、文化財保護、観光といった各方面の審議委員を多数務めている。これも敬一の持ち前の公共心からであろう。退職した昭和35年からはさっそく北海道自然公園審議会委



写真21 今田32 利尻・礼文を描いたスケッチ。上:トド島、下:香深

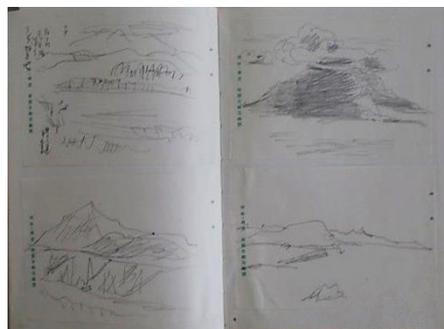


写真22 今田32 利尻・礼文を描いたスケッチ

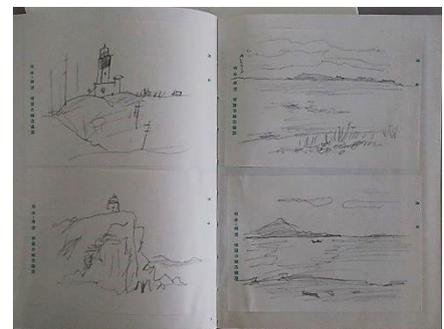


写真23 今田32 利尻・礼文を描いたスケッチ。左:灯台、右:海岸からの風景

員を務めている。この「利尻・礼文」ノートは昭和36年に作られたもので、内容は利尻、礼文を訪れた時の現地の詳細な記録と、現地で描いたと思われるスケッチが添付されている(【写真21】【写真22】【写真23】)。

現地での記録は、自然についてはもちろん、観察力のすぐれた敬一らしく道中立ち寄った食堂でのサービスの様子も以下のように細かく記録している。

サービスのよい食堂  
 いらっしやいませ、どうぞ  
 (主人と給仕が同時にいう。給仕がかぶってという事もある。)  
 お二階が空いています  
 主人が熱心  
 ライスカレーの味よろし、水もきれいで冷く、鉄管臭なし  
 食べ終わってすぐお茶を持ってきて食器を片づける  
 有難うございました(主人も給仕もいう)  
 手洗いには液状石ケン  
 給仕はそろいの制服、わさいの前掛、胸に番号札  
 靴下をはき、靴をはく(靴の手入れ少々悪し)

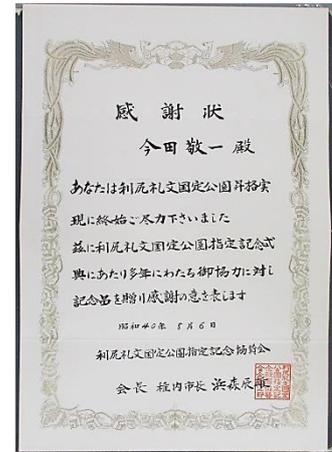


写真24 今田304 利尻・礼文国定公園昇格の感謝状

このノートが書かれた昭和36年には、北海道観光審議会委員も務めていたため、利尻・礼文の調査は公園、そして観光と、一連のつながりをもった調査だったのであろう。前述の妻へ宛てた書簡同様、観察力の優れた敬一の目から見た風景の記録であり、風景の記録は時には文章として、時には絵として残されていた。この年(昭和36年)、敬一は自然保護功労者として厚生労働大臣より表彰された。

利尻・礼文は昭和39年(1964)に国定公園に指定され、自然公園制定に尽力した敬一には昭和40年に感謝状が贈られた(【写真24】)。

## 8 『北海道美術史』と『道展五十年史』



写真25 今田316『続・北海道美術史稿』と題した原稿

退職後は、各審議委員を務めていた敬一であったが、昭和45年(1970)には『北海道美術史』を出版している。これは今日に至るまで本道美術史の重要な文献とされている<sup>23</sup>。

敬一は「えぞまつ」<sup>24</sup>で美術史料について以下のように述べている。「北海道の美術史にふれるとき、必ずちゃんとした史料とにらみ合わせることにしている。若いころから大学に暮らし、文献集めにいろいろ苦労したのがマニア化し、北海道の美術と関係があれば、たとえ紙切れでも手に入れ保存してきた。その数十年の蓄積が私の美術史料で、厚い本などどちがい散逸しやすく、愛情をこめて保存しなければならなかった。十分というには程遠いが、今となっては珍しいもの貴重なものもある。これを整理するのも楽しみである」。また、『21ACT』<sup>25</sup>では、『北海道美術史』執筆の際、いちばん役に立ったのは「パンフレットの類」であったと述べている。このように集めた美術史料を元に書かれたのが『北海道美術史』であったのだろう。

この『北海道美術史』について、『北海道の出版文化史』では、「地域文化の積みあげ」として構築されたことが画期的である<sup>26</sup>と評価し、また美術(芸術)と森林美学(科学)の総合であり、

観るということの深い意味をさぐる人間的な考察の一成果だったのではないかと<sup>27</sup>と評価している。

公文書館所蔵「今田資料」に、「続・北海道美術史稿」と題した直筆原稿がある(【写真25】)。内容は、大正14年の道展創設から、最後は『北海道美術史』に掲載された北海タイムス主催で



写真26 今田315 『道展四十年史』と原稿

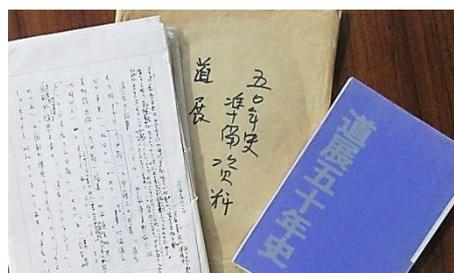


写真27 今田35 『道展五十年史』と原稿

行われた座談会(昭和12年)の続編までが記されている。この「続・北海道美術史稿」は『美術ペン』(第12号～第28号、第48号～第49号)と、『21ACT』(50号～55号)に掲載されたことが確認できた。それらの直筆原稿の一部が「今田資料」に残されている。

また敬一が創立時から関わってきた道展の四十年史、五十年史の原稿も、「今田資料」には残されている(【写真26】【写真27】)。この四十年史は昭和40年、五十年史は昭和50年に編纂されている。道展創立50年の記念展を前に、道展は北海道開発功労賞を受賞し、授賞式は昭和50年10月28日北海道開拓記念館で行われた。

## 9 風土を理解し、風土を愛す

昭和52年、敬一の妻・寛子が心不全で突然、他界した。敬一は本当にショックを受け、好きな酒で気がまぎれることもなく、慰められたのは結局絵だったという<sup>28</sup>。晩年、敬一は大谷短大とHBC婦人文化教室で油彩を教えた。若い人たちに「風景から自分の美的感覚を養え」「絵に理屈があつてはならない。説明するな」と言っていたという<sup>29</sup>。敬一が目指したのは、風景から養った理屈の無い絵であったのだろう。敬一は、「優れた作品は風土から生まれ、それを認識し、それをもとにして自己を養い、作品を作り上げていくべきでしょう」と述べている<sup>30</sup>。

林学を研究していた敬一は、自然保護や観光は“副業”だったという。しかし時代が進むにつれてそれが逆になり、道内の自然公園の指定や維持経営の基本プランを建てるようになった。観光開発に力を入れ過ぎるとやはり自然破壊がひどく、自然保護区域をもっと増やしてよいと思うし、当事者がその大切さを認識すべきとしている<sup>31</sup>。

これもすべて敬一の体験から得たものであり、幼少期から自然の中を歩き、自然の中で遊び、そこから培った力で森を育てることを研究し、調査で全道を回り、自然を眺め、感じ、そこから養われた感覚を、絵で表現していたのだろう。

自身について、「こんな私は、当時風変りな存在であった。周囲の評価にかかわらず、私は五十年先を歩いているつもりだった」<sup>32</sup>と語っていた敬一は、昭和56年5月5日、自宅で倒れそのまま帰らぬ人となった。84歳であった。

遺稿となった『さっぽろ文庫17 札幌の絵画』では、以下のように述べている。「このようにわたしは、札幌の美術をながい間見てきた。そして教えられたことは、風土を理解し風土を愛すことからすぐれた美術が生まれるということであった」。敬一の人生は、札幌の風土を愛した人生であったのだろう。

**おわりに** 本稿では、「今田資料」の再編成の過程と、今田敬一の生涯を振り返りながら「今田資料」の一部を紹介した。第1章では、35年前の整理、分類を見直し、現在の公文書館の利用に適した方法で、再編成をするという作業について報告した。分類や登録には正解はないと筆者は考える。館の特性や利用状況を鑑み、時代に即した編成をする必要がある。今回の作業で終りではなく、今後は件名登録、そして定期的に補修、修復が必要となり、これからも資料整理は続いていくであろう。

また公文書館所蔵資料だけでは、今田敬一の活動すべてを把握することはできない。今回紹介出来た資料は僅かであり、分散してしまっている道立図書館所蔵分と近代美術館所蔵分を合わせて検討する必要があるが、時間と字数の都合もあり他館の資料との検討まではできなかった。「今田資料」のみならず、今後も引続き所蔵資料調査を続けることが、公文書館としての使命の一つでもある。

今年、敬一が亡くなって36年である。敬一は50年先の時代を歩いていたとすると、本稿を執筆している平成28年(2016)現在、時代はまだ敬一に追いついていない。晩年の敬一は今よりも少し先を歩いていたのであろう。50年先の時代を歩いていた敬一の眼には、現在の札幌の風景をどのように映るのであろうか。また現代を生きる私たちは、敬一が残した資料を通じ、どのような風景を見ることができるのであろうか。本稿が多くの方に「今田資料」を知ってもらいきっかけとなり、ひいては今田敬一研究あるいは、北海道の文化、観光、自然保護等の事業研究の発展につながることを願う。

(前・札幌市公文書館専門員)

<sup>1</sup> 例えば、本来1冊であったと思われる「昭和39年、第二回屋外広告審議会」の内、会議録は他の年代と合本され「北海道屋外広告物審議会会議資料1」として「分類記号:670 商業」へ登録され、会議資料は「北海道都市計画公園」として「分類記号:500 技術・工学」へ登録されていた。

<sup>2</sup> 能勢真美は明治30年(1897)、白老生まれの画家。小学校から40年間札幌で過ごし、昭和23年(1948)より帯広に移住。道展の創立会員。敬一は『さっぽろ文庫17 札幌の絵画』(札幌市教育委員会編 1981年)で能勢の絵を「札幌の風土から生まれた絵」と評価している。

- 
- 3 今田敬一「森林美学」(『毎日新聞(夕刊)』昭和47年2月14日付)
  - 4 滝川市美術自然史館『黒百合会の画家たち 有島武郎・今田敬一』滝川市美術自然史館 平成13年 p5
  - 5 桑園地区連合町内会桑園誌編集実行委員会『桑園誌—30年の足跡をたどる』桑園地区連合町内会 平成17年 p134
  - 6 札幌市教育委員会文化資料室編『さっぽろ文庫43 大正の話』札幌市教育委員会 昭和62年 p121
  - 7 前掲『桑園誌』p160
  - 8 同前 p309
  - 9 「今田資料」(仮ID:今田349)より。
  - 10 『新札幌市史 第四巻』(札幌市教育委員会編 平成9年) p125
  - 11 同前 p140
  - 12 同前 p140
  - 13 今田敬一「私と絵」(北大季刊刊行会『北大季刊 第二号』北海道大学 昭和27年)p42～43
  - 14 谷瑛子「北海道における戦後の児童出版物—1945年から1950年まで—」(『北星学園女子短期大学紀要』第31号 北星学園女子短期大学 平成7年)
  - 15 谷瑛子「児童雑誌『北の子供』解題(一)と細目」(『北星学園女子短期大学紀要』第27号 北星学園女子短期大学 平成3年)p12
  - 16 今田敬一「えぞまつ 親から聞いた昔話」(『北海タイムス(夕刊)』昭和51年2月7日付)
  - 17 『こども朝日』6巻15号 朝日新聞社 p14
  - 18 『こども朝日』6巻16号 朝日新聞社 p14
  - 19 前掲「私と絵」p42～43
  - 20 北海道大学演習林『北海道大学演習林60年の歩み』(北海道大学演習林 昭和38年) p13～14
  - 21 渡辺順一「中川演習林回想録」(北海道大学農学部附属演習林『北大演習林80年』北海道大学農学部附属演習林 昭和56年)p71
  - 22 前掲「私と絵」p40
  - 23 『今田敬一の眼 北の風土と美術』北海道近代美術館 平成22年2月
  - 24 今田敬一「えぞまつ 私の美術史料」(『北海タイムス(夕刊)』昭和51年2月24日付)
  - 25 北海道時計台文化協会『21ACT』vol.4 No.47 昭和50年11月 p10
  - 26 北海道の出版文化史編集委員会『北海道の出版文化史—幕末から昭和まで』(北海道出版企画センター 平成20年) p409
  - 27 同前 p434
  - 28 今田敬一「私のなかの歴史 道展55年 絵で思うこと」(『北海道新聞(夕刊)』昭和55年11月18日付)
  - 29 同前
  - 30 同前
  - 31 同前
  - 32 今田敬一「わたしの道」(『北海タイムス』昭和48年2月2日付)